

平成25年9月10日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>



←
流域の新田開発により「沃野」が形成され、
その中を流れる小貝川と、そこにそそり立つ
筑波山（『写真と音楽あれこれ』HPより転載）



→
関八州の治水工事や新田開発等に多大なる業績をあげた伊奈忠治の銅像（川口駅前キュボ・ラ本館内）（『関東郡代伊奈サミットの会』HPより転載）

校歌に謳われた沃野（その3）

鮮烈なインパクトある響きで、耳に残って離れない豊かな大地・「沃野」。作詞した堀越晋先輩（中11回卒）は、そこに、先人達に対する深い畏敬の念を込めていたと言えます。豊かな大地は、幾世代にもわたる人々の知恵と力、汗と涙の賜であることを、日々実感していたからでしょう。「沃野」を考えるなかで、今号は、県南地区の新田開発を取り上げてみます。

新田開発と伊奈氏

江戸初期の新田開発にあつて、大きく貢献したのは伊奈一族でした。幕府初期の「関東代官伊奈氏」は関八州の幕府直轄領約30万石を管轄し、行政・裁判・年貢徴収等を取り仕切り、警察権も統括していました。また將軍の鷹狩りをするための鷹場の管理も担当するなど、幕府組織の重要な部分を占めていたのです。

伊奈氏の陣屋は、はじめ、伊奈屋敷跡が現在も残る武蔵国小室（現埼玉県北足立郡伊奈町）に置かれ、後に同国赤山（現埼玉県川口市）に移されました。さらに同国小菅（現東京都葛飾区小菅）にも陣屋が設けられ、ここには家臣を代官として配置していました。

家康の入府（秀吉の全国統一の後、従来の支配地である三河・遠江・駿河・信濃・甲斐の領地150万石を召し上げられた徳川家康が、あらためて北条氏の領地であつた武蔵・伊豆・相模・上野・上総・下総・下野の一部・常陸の一部250万石を与えられ、北条氏の拠点小田原ではなく、江戸に入ったこと。なお家康は、入府を、農業社会での祭日にあわせて、八朔にあたる8月1日にしました）後、武蔵国小室等に1万石を与えられた伊奈忠次は、関東代官頭として大久保氏・彦坂氏・長谷川氏とともに家康の関東支配に貢献しました。各地で検地・新田開発・河川改修に敏腕を振るい、利根川や荒川の付け替え普請・知行割・寺社政策等など、江戸幕府の財政基盤の確立に大きく寄与したのです。関東各地に残る「備前渠」「備前堤」とよばれる運河や堤防は、いずれも忠次の官位「備前守」に由来しています。



徳川頼房の依頼で伊奈忠次が造った水戸市の備前堀。忠次の像がありません（『水戸商工会議所』HPより転載）

そればかりでなく、忠次は、諸国からの水運を計り、江戸の繁栄をもたらすとともに、農民には炭焼き・養蚕・製塩などをすすめ、桑・麻・楮などの栽培方法を伝え広めたため、神仏のように厚く敬われたといわれています。それゆえ、埼玉県の伊奈町は忠次にちなんで「伊奈」の名を町名とし、また次男忠治は、茨城県筑波郡伊奈町（現つくばみらい市伊奈地区）の町名に取り上げられ、県を超えて親子二代で地名の由来となっています。

旧筑波郡伊奈町と伊奈忠治

伊奈忠治については、父忠次・兄忠政の仕事を引き継ぎ、関八州の治水工事・新田開発・河川改修を行い、荒川開削・江戸川開削に携わりました。江戸初期の利根川東遷事業（江戸の町は利根川の洪水に悩まされたが、この事業により、利根川は現在の流路に近くなり、江戸を洪水の危険から救うとともに、新田開発や利根川から関宿を経て江戸に繋がる水運にも大きな影響を及ぼしました）の多くが忠治の業績であり、鬼怒川と小貝川の分流工事や下総国・常陸国一帯の堤防工事を担当しました。中でも、小貝川には、上流から福岡堰・岡堰・豊田堰の3つの堰を構築し、その結果、単に地域を洪水の危機から救

ったのみならず、用水路・排水路を開削して、伊奈・谷和原3万石（現つくばみらい市）、相馬2万石（現取手市藤代地区）と呼ばれる美田地帯をつくり出す大事業も成し遂げました。



小貝川にある現在の「豊田堰」(上)と福岡堰 (左)

そして、忠治の業績を称える人々によって、福岡堰北東の小貝川堤防横（つくば市真瀬地区）には、昭和16（1941）年、伊奈神社が祀られ、今日でもその業績が偲ばれています。また取手市内毛有の毛有薬師堂境内には、昭和33（1958）年、伊奈忠治顕彰碑が建立されています。



「伊奈神社」(上)
毛有薬師堂内の「伊奈忠治顕彰碑」(左)

新田開発村の低湿地での工夫

前号に触れたように、新田開発は、領主や農民にとって収入増に繋がる利得がありました。その一方で、多くのリスクも伴いました。最大のものは、「水への脅威」でした。水に対する備えは、あらゆる知恵と工夫を結集して対策が講じられたのです。主なものをだけあげてみます。次のようなものがあります。

① 屋敷内の土盛り

「水対策」として主屋部分に盛り土をするのは、農村各地でよく目にする光景ですが、新田開発村の中では、屋敷地全体に盛り土を施す家が数多く確認されています。屋敷全体が水田面より1m以上も盛り土されている例もあります。その土の量たるや膨大なものがあり、それを、何キロも離れた台地から運んできているのです。自然災害に備え、安定した生活を送るための努力・忍耐には驚くばかりです。

② 水塚・水屋

屋敷内の一角に特に高く土を積み、その上に倉庫兼住居設備を持つ建物がよく設けられています。これが水塚・水屋といわれるもので、まさに水害時には緊急の避難所になります。したがって、水塚は普段は倉庫として使用されていますが、中には常に緊急時に生活するための必要最低限の食糧が収納され、人が寝起きする準備もなされています。

また、盛り土そのものにも興味深い特徴があります。現在の取手市藤代地区を例にとれば、それは、標高とかなり深い関係があると言えます。あるも

のは周囲の水田より3mもの高さがあるかと思えば、あるものは屋敷地よりわずかに4cm、水田面からでも1mにすぎないものもあります。昭和25（1950）年の小貝川堤防決壊による水害の際には、双方とも水塚の土台部分が水に浸かった程度で、大事に至らずに済んだそうですが、標高の低い前者の家では、主屋は床上2mまで水没してしまう洪水に見舞われ、改めてそれよりも高い地に建つ「水塚」設置の知恵を実感したと言います。これをみても、先人達は屋敷の標高を日頃の生活の中で意識し、土盛りの高さも決めていたことがわかります。さらに言えば、盛り土は近隣の台地から運んできたのですが、土を締める効果を考え、貝塚の貝を含む土を利用して水塚も見られるのです。これもまた生活の知恵と言えるのでしょうか！



屋敷内を土盛りした家。(上)。納屋にある舟3艘。以前は納屋の天井に置かれていたという(上左)。屋敷内にあってひととき高い盛り土の上にある水塚と氏神様(右)

③ 構堀（かまえぼり）

水への備えには構堀もあります。これは、屋敷全体を堀で囲んだもので、中には、幅4〜5mの大規模のものもあります。当然、排水の便を第一義的に考えたものでしょうが、掘り上げた土は、屋敷地や水塚の盛り土に利用したばかりでなく、それをもって堀内側に土塁を築いたりして、備えを一層強化したところも見られます。



軒下まで浸水した昭和25年の藤代地区の水害(右左)、『写真記録茨城の20世紀』より転載
敷地の周りに列植された屋敷林と生垣(下右)
排水路として屋敷を囲んでいる構堀(下左)

④ 舟

低湿地の水田地帯では、農作業に使用する舟とは別に、緊急時に米俵等を載せて避難するために、かなり大きめの舟が用意されている場合が結構あります。舟は、ふだんは納屋等の天井や軒に吊されていますが、以前の出水の際には、荷物を積んで広い場所に待機させ、増水とともに、これに乗って避難したとのことでした。

⑤ 生垣・屋敷森

生垣はどこの農村を訪ねても一般に見かける風景です。防風の備えであることが多く、その典型的な例は散村の代表として知られる富山県の砺波平野が有名です。(わが土浦一高を含め、明治期の旧制中学校等の建造物で、国指定重文は全国で5校ありますが、そのうちの一つである旧富山県立農学校(現南砺福野高校)はそのど真ん中に建っています)ただ、低湿地における生垣は、篠竹や真竹で構成されていることがよくあります。これは、単に防風がねらいではなく増水の際のゴミを遮る目的を持っているところに特徴があるとも言えます。

屋敷森も台地状の農村にはよく見られるのですが、低湿地においては、生活上欠かすことの出来ない「たき木」や建築材を確保したいとのねらいが顕著であり、そのための植林が進められた結果なのです。これも、人々が生活の改良に意を用いた証であり、その工夫には感心するばかりです。

(次号に続く) (高21回卒 鈴木義人)

県外文化財視察が実施されました

平成25年度県外文化財視察は7月27日(土)に大曾根副会長(高4回卒)・豊崎校長(高25回卒)をはじめ、県教育庁職員ら多数の関係者の参加を得て行われました。今回は「我が国近代建築の父」ジョサイア・コンドル及びその薫陶を受けた辰野金吾の作品群を訪ねながら、辰野の愛弟子、本校旧本館の設計者駒村謹治をしのぶ」とのテーマで、かすみがうら・石岡両市の文化財保護審議会委員の神戸信俊氏(高19回卒)を講師に迎え、日本銀行、東京駅丸の内駅舎、旧岩崎邸、東京大学工学部建築学科(ここは東京大学工学部教授池田誠氏(高39回卒)のご案内)など6つの建造物を視察しました。